月　報

― 學　會 ―

富山縣產業組合病院第4回醫學集談會演題

（於本院醫局　昭和16年12月16日）

1．骨髓性白血病の1例に就て　泉　典　一
2．標本供覽　豐　田　文　一
　（イ）上顎洞血瘤腫
　（ロ）手術後頰部囊腫（久保）
　（ハ）咽頭角化症
3．攝護腺肥大症並に腫瘍の「レントゲン像供覽　山　田　祥　二
4．姙娠中毒症と急性肺水腫　倉　本　政　雄
5．滅菌容器の栓の改良に就て　越　田　吉　郎
6．利用せられる配伍禁忌の2，3例に就て　西　村　松　太　郎
7．網膜燐酸反應より見たる視機轉の「ヘミスムス」に就て　小　澤　安　彦

富山縣產業組合病院第5回醫學集談會演題

（於本院醫局　昭和17年3月14日）

1．X線間接撮影に就て　永　田　儀　四　郎
2．姙娠中毒性肺水腫と思はるゝ症例追加　倉　本　政　雄
3．荻野氏說によりその受胎期を說明し得たる姙娠例　倉　本　政　雄
4．暗調應を由來する化學的機作に就て　小　澤　安　彦

富山縣產業組合病院第6回醫學集談會記事

（於本院醫局　昭和17年10月27日）

豐　田　文　一　報

1．臨　牀　例

豐　田　文　一

（イ）舌ゴム腫

患者　67歲，農婦.

約4ヶ月前より左側舌緣に潰瘍發生し疼痛あり種々醫療を受けてゐたが緩解する模樣もない，舌癌の疑をおかれ，半ば不治と諦めてゐたが，最近特に疼痛が增加し，食事攝取も困難になつたので私の外來を訪ねた.

舌の所見は舌左側緣に約1cmの楕圓形の潰瘍があり可なり深い．その底部は灰白色の僞膜で蓋はれてゐる．觸るゝに激痛がある．頸部或は顎下部に淋巴腺腫

脹を認めない．尙この潰瘍に對する下顎第II大臼齒は內方に傾き直接潰瘍面と接觸し，恰も齒牙の刺戟による舌癌發生の場合を思はせる．潰瘍及びその周圍組織の硬度は柔軟にして，舌癌の場合の樣な强靭な感を與へない．それで私は舌黴毒の疑をおき血液檢査を行つた．ワ氏反應(卅)，村田氏反應(卅)，卽ち舌ゴム腫の確診を得．驅黴療法により漸次快方に向ひつゝある．由來舌ゴム腫は可なり稀なものであつて，舌中央に發生することが多く，本例の如く舌緣に發生することは甚だ尠く，且つ亦本例は齒牙刺戟により發生せる舌癌と似てゐる點が興味のある所である．

（ロ） 耳性腦竇血栓兼膿瘍

患者 12歳の女兒．

多年耳漏に惱んでゐる．約1週間前耳痛を訴へ，それと同時に發熱あり，腸チフス」の疑にて經過觀察中であつたが，2日前より急に惡寒戰慄を以て高熱を來し，耳漏の增加をみる．耳所見は右鼓膜は强度に發赤し，後上部に小穿孔があり搏動性に惡臭ある膿汁の排出がある．耳下部は瀰漫性に輕度に發赤し，可なり著しい壓痛がある．側頸部に沿ひ索狀物がふれる．乳嘴突起部の壓痛はそれ程著明でない．以上の所見より耳性腦竇血栓の疑をおき右耳根治手術を施行す．手術所見は蜂窠は眞珠腫にて全く崩壞し，尖端に於てS字狀竇を露出した所灰綠色を呈し，惡穢なる肉芽にて充され，竇內より搏動性に膿汁の流出をみた．靜脈球まで追及し術を終る．併しその後も每日弛張熱あり，各種の治療を行ふが効はない．術後7日目にグルーネルト氏術式による內頸靜脈結紮を行ふ．內頸靜脈は既に血栓を形成し，上方に多量の膿汁あり．血栓塊を摘出す(供覽)．その後稍下熱し，氣分稍緩解したが，6日目突然嘔吐と共に意識不明，瞳孔左右不同，斜視が起り，脈搏微弱となり，脊髓液穿刺により極めて濃厚なる膿汁を得，その後3日目に死の轉機をとる．

本例に於て手術時硬腦膜は健全であり，血栓のみを主症狀とし，敗血樣症狀を呈し，腦膿瘍の存在が不明であつたが，頑固な便秘があり，之が腦膿瘍の主要徵候の一つであつたが，他に著明な變化なく，膿瘍の腦室への破壞症狀を呈して始めて腦膿瘍の存在を知り得たのである．

（ハ） 食道周圍膿瘍

患者 47歳，仲仕．

約2週間前咽頭痛あり，その後食物嚥下に際し，胸骨上端部に於て狹窄感あり，2，3日來固形物の流通困難となる．「レ線透視により食道第1狹窄部上部に造影劑の停滯あり．食道直達鏡檢査により，門齒より19cmの部位に於て，後面より食道粘膜の半球狀に膨隆する所があり，表面可なり强度に發赤し，波動あるものゝ樣である．食道周圍膿瘍の疑を以て，「ズルフォンアミッド劑の注射，投與を行つた所漸次症狀緩和し，6日目再び直達鏡檢査を行つた所腫脹の著明な減退を認めた．

本例は急性咽頭炎後に來た轉移性の食道周圍膿瘍と考へられるものである．

2．陰莖に原發せる「ペーデエット」氏病1例

山 田 祥 二

患者 西田某男，66Lj.

家族歷，既往歷 特記すべき事はない．

現病歷 昭和17年6月頃から陰莖が腫脹し多少疼痛があつたが排尿障碍は認めなかつたし患者は性病と思ひ，世間態もある事とて放置し居たのに最近では兩側の橫痃も生じ日夜の別なく局所は痛み殊に肛門部臀部に放散性の疼痛を感ずる樣になつて外來を訪れた．

現症 榮養，體格共に中等度，眼結膜多少貧血性．胸，腹部に聽，打診上著變を認めない．膝蓋反射減弱す．陰部を看るに兩側鼠蹊腺及び股腺は數個拇指頭大に腫脹せるも硬度著明ではなく，唯右側の鼠蹊部のものは稍々硬度硬く壓痛も訴へて居るが他のものは比較的軟くして且つ壓痛も著明ではない．陰莖は包莖にして龜頭部に相當する部分は全汎に涉り暗紫赤色に腫脹し壓痛あり且つ壓により包莖間より稀薄なる惡臭ある膿汁は血液を混じて壓出させらる．右側陰囊は左側に比し稍々大にして陰囊水腫を有するものなり．

經過 直ちに陰莖癌腫の診斷の下に陰莖切斷術及び轉移淋巴腺摘出根治手術を施行せり．

組織學的所見 表皮細胞は一般に粗鬆にして配列は稍々不規則なり．眞皮上層は一般に小圓形細胞の浸潤著明にして中層，下層にはその結締組織中に比較的大なる透明なる細胞不規則に多數看らる．而し核分裂は認められない．淋巴腺中の濾胞中には特殊なる細胞は

認められず急性炎症に認められる所見なり.

追　　加

豐　田　文　一

私は43歳の家婦に見られた痂皮形成の甚しい，頑固な鼻前庭潰瘍性疾患で，組織學的所見にて癌前驅症狀の認められた症例を經驗し，皮膚科學會金澤地方會第100回記念講演會で發表したが，山田君の症例の組織學的所見の相似た點が興味があり，顯微鏡標本の寫眞を供覽したい.

3．特殊村落に於ける綜合檢診成績報告

(2) 皮膚科的所見　附　マンツー氏反應成績

山　田　祥　二

佝僂病簇生地と目された一村落に就て綜合檢診を行ひその皮膚科的所見を述べ加へて「マンツー氏」反應成績に就て比較を試みた．詳細は原著として近く本誌に發表の豫定である.

追　　加

豐　田　文　一

氷見郡速川村に於ける綜合檢診の成績に就ては私は倉本君と共に耳鼻咽喉科的所見及び寄生蟲の檢査成績，關君は齒科的所見に就き近く原著として發表をみるのであるが，耳鼻科的所見に於ては鼻腔所見に萎縮性鼻炎の多數認められたことが，本村に未だ佝僂病的傾向のあることが認められる一證左と考へられるのであつて，我々としては綜合檢診の結果に基いて，農村の保健對策に種々の協力を行ふべきものであることを强調した.

4．小兒に於ける有熱性眼疾患の經驗

小兒科　山　田　義　孝

本年7，8兩月に於て高熱を主要症狀とし本院小兒科を訪れ又は眼科より診察を依頼されたる患兒6例に就き報告す，これ等患兒は何れも眼科に於て義膜性結膜炎と診斷されたるものにして 38.0°C—40.0°C 以上の熱發あり小兒科的にはかゝる熱發の原因と思考さるゝ所見を認めざるものにして何れも非ヂフテリー性の義膜性結膜炎を認められたるものなり．本疾患は豫後良好にして夏季に流行するものゝ如く同一疾患と思考さるゝは報告のある所にして小兒に於て特に發熱を伴ひ一度は小兒科醫を訪るゝは興味なしとせざる所なり，同疾患の病原菌檢索は次回機會にゆづるも今回の流行には「ネオヂセプタール」內服が有効なりしものゝ如く思考す(自抄).

5．齒列異常に就て

關　　剛　三　郎

齒列異常とは全身諸器官，全身の疾患並に異常と齒列とは密接なる關係を有する.

齒列異常は顎の發育障碍，又咀嚼能力減退に依る消化機能の影響，腦下垂體發育不全等を來す．後者に於ける全身疾患並に異常の齒列に及ぼす影響としては胎生中の榮養障碍，器械的外壓，出生後個體自身による場合である急性熱性疾患，微毒，小兒榮養障碍，內分泌異常等齒列異常を惹起する素因を形成するものである.

齒列異常の原因は遺傳的，先天的（胎生中に於ける

原因)，後天的原因に依る場合は比較的少なく，後天　的原因に依る場合頻度高し.

6．扁桃腺炎性病竈感染に就て
附　口蓋扁桃腺の重量に關する2，3觀察

豐　田　文　一

身體臟器の疾患であつて，而も扁桃腺と極めて密接な關係を有する遠隔疾患を系統的傳染疾患と稱し，或は焦點感染乃至病竈感染(Focal infection)とも唱へられる．卽ち口蓋扁桃腺を一つの焦點とし，この局所的病竈が遠くにある器官，或は器官系に遠隔作用を及ぼして疾患を惹起するのである．

演者は文獻に記載された種々の疾患に就き說明し，併せて演者自身の經驗せる關節ロイマチスムス」，腎炎，皮膚疾患，蟲垂炎，敗血症，肺門淋巴腺炎等に就き述べ，扁桃腺摘出は之等疾患に對し，豫防的或は治療的効果のある所以を述べた．

次で昭和16年3月－11月迄に摘出した口蓋扁桃腺の重量の測定成績を述べた．

卽ち

66例（7歳－27歳）131個

平均重量　3.87gr±0.23

（最小 0.75gr，最大 8.20gr）

1）年齡別との關係

10歳以下　13例　3.23gr±0.20

11－15歳　23例　3.91gr±0.36

16－20歳　22例　4.16gr±0.43

21歳以上　8例　3.97gr±0.67

2）臨牀上の大さとの關係（マツケンジーの分類による）

(卄)　50個　4.43gr±0.41

(＋)　57個　3.58gr±0.29

(－)　24個　3.85gr±0.71

3）病歷との關係

習慣性アンギーナ」のあるもの

78個　4.02±0.23

然らざるもの

49個　3.73gr±0.31

以上の如き成績にして目下多數の症例に就き檢索中にして，口蓋扁桃腺手術に際し，單に見かけの上の大さのみによることなくその既往歷，或は全身疾患を考慮に入れ，假令扁桃腺の肥大を認むることのない場合に於ても扁桃腺摘出の適應なることの尠くないことを强調した．

7．トラコーマ瑣談

小　澤　安　彥

トラコーマの病原體並に其の治療法に關し，本邦眼科學界に於ける最近の傾向を紹介し，併せて本邦壯丁，學校生徒學生の最近20年間のトラコーマ患者數を表に就て示し，夫等患者の逐年的傾向に關し述ぶるところがあつた．

8．腸チフス」に併發せる「イレムス手術治驗例

關　川　潤　治

患者は53歳の農婦．

家族歷及び既往歷に特記すべきものなし．

現病歷　初診20日前より腸チフス」にて某醫の治療を受け居たる所約10日前突然激烈なる腹痛下血，一般狀態の惡化を來し主治醫の適切なる處置により一般狀態は再び良好となれるも腹痛は依然として緩解せず已ならず次第に激烈となり放屁便通缺如惡臭ある嘔吐を來すに至る．主治醫により再三再四高壓浣腸が試みられたるも少しも奏効を認めず．

現症　腹部は稍膨滿し蠕動亢進著明一見イレウス」なることを認めらる．榮養はかなり衰へたるも體溫36.5°C，脈搏90緊張せり．

手術　周到なる前處置，局所麻醉の下に臍下正中線にて開腹す，廻盲部より約20糎上方に於て廻腸は右腸

骨窩深く癒着穿孔小膿瘍を形成し該腸蹄係部を廻つて廻腸上部が繩狀に强く經絡絞扼し，尙廻腸は廣汎圍に亘り下腹部の體壁腹膜と密に强く癒着せり，仍て癒着穿孔部を剝離し穿孔部を縫合し膿瘍部は「タンポン」を行ひ腹外に誘導し經絡せる腸を解き尙體壁腹膜と密に癒着せる部は剝離困難なりしを以て其の上下部に於て側々吻合を行へり．

經過　術後の經過は極めて良好，自然放屁，便通あり腹痛は全く消失し次第に治癒に向ひつゝあり．

9．現下の藥品情勢に就て

越　田　吉　郎

大東亞戰爭開始以來藥品の需要は國の內外に著しく增加し，特に南方占領地に於ける需要は特に著しく，國內の增產は戰爭前の數倍に增加するも，其の需要を滿すこと困難なるものゝ如し．藥品も統制に統制を加へられ，繁用藥品は殆んど統制下にあり，玆に種々代用品の研究に至る．故にその使用に當り，此の如き事情を考慮せられ，充分現下の情勢に卽應せられんことを望む．

金澤醫學會第175回例會及本年度總會

12月24日(木曜日)午後2時より金澤醫科大學法醫學講義室に於て開會，其の演說次の如し．

1．胃癌腫を伴ひたる端太症剖檢例（標本供覽）

金澤醫科大學病理學教室
宮　田　　榮

41歲の男子，12—3歲頃より身長急激に發育せりと稱す．廣範なる轉移を伴へる胃硬性癌のため死の轉歸を取れり．身長180糎，外見上端太症の像を示せり．內臟巨大症は證明せられず．腦下垂體は重量1.8瓦にして前葉左側後方に大さ大豆大なる腫瘤存せり．鏡檢上，エオジン嗜好性細胞より成れる腺腫と診斷せり．其他の內分泌腺に於ては，膠樣性甲狀腺腫（重量69.5瓦），右副腎の皮質腺腫，睾丸萎小殊に間細胞減少あり．上皮小體，胸腺，膵臟，松果腺には著變を認めしめざりき．演者は本例に於て，胃癌と腦下垂體腺腫との併發を，1．偶然の共存なりや，2．兩者は共通の基礎を有するか，3．後者が前者の發生乃至發育に何らかの寄與をなしたるものなりやの三點に就き考察を加へたり．

2．心室の期外收縮に依る週期の變化に就て

金澤醫科大學生理學教室
上　野　一　晴

演者は自然に搏動しつゝある蟇心の心室に單一刺戟を與へて期外收縮を起させた場合に心室及びその上下の部(卽ち心房及び心臟球)に起る週期の變化，殊に

1．代償性休止の成因
2．介在性期外收縮
3．Lewis & Master の所謂干涉期
4．心室及び心臟球の續發性期外收縮に就て述べる．

演說終了後本年度總會に入り庶務會計報告あり．本年度役員次の如く決定せり．

會長　石坂伸吉
理事　中村八太郎　大里俊吾　熊埜御堂進